

聖書：マタイ 13：44～58

説教題：畑に隠された宝

日時：2019年7月21日（朝拝）

イエス様のたとえがたくさん出て来るマタイの福音書第13章。今日はその3回目、最後の部分となります。まず出て来るのは「天の御国は畑に隠された宝のようである」というたとえです。昔は今日のような銀行はありませんでした。大切なものを保管しておく金庫のようなものもありません。そういう時代の人々にとって地面を掘ってお金や宝を隠すことは良くあったようです。後の25章に出て来るタラントのたとえでも、あるしもべは主人から預かった1タラントを地の中に隠しておいたという話が出て来ます。人々は後から掘り出そうと考えて、しばらくの間、このようなことをしました。ところが中には事情があって、そのままになっている宝もあった。掘り出す前にその人が死んでしまったという場合、あるいは戦争等によって土地が他人のものになったり、売買を繰り返す内に宝がそこに眠っているとは誰も知らない状況になっていたという場合、等々。そうしてある日、突然ある人が、その宝を発見します。天の御国はまさにその宝にたとえられるとイエス様は言うのです。

これは天の御国についてのいくつかの真理を語っています。一つはそれは隠れた状態にあるということです。人目にはっきりは分らない。多くの人は気が付かず、その上を歩き、素通りしている。二つ目に、重大な事実、しかしそれはそこにある！ということです。多くの人が知らないでいるからと言って、それがそこにあるかないかは不確かであるということにはなりません。畑の中に宝があるように、天の御国も現実にこの世界にある。イエス様の到来とともに来ている。三つ目は、天の御国は宝であること、しかもとてつもない宝であるということです。天の御国とは、これまでも見て来ましたように、神の恵み深いご支配と言い換えることができます。人間は罪を犯して神との交わりを失い、サタンの方の下にあります。それゆえ様々な苦しみと将来の滅びに向かう生活の中にある。そんな私たちのところにイエス様とともに神の国が到来している。ここにおいて神との正しい関係に立ち戻ることができます。その結果、神が意図した本来の状態へと回復されることができる。その具体的な目に見える現れとして様々な癒やしもなされていました。そして滅びに向かっていた私たちが神と永遠とともに生きる者と

される。これはとてつもない宝です。そして四つ目にそれを見出した人は大喜びでそれを買うということです。全財産を売り払ってでもそうする。もちろん救いはお金を出して買うものではありませんが、この意味は、これを得るためには何でも捨てるということです。それほどの優先事項にするということです。これはその人にとっては犠牲でも何でもありません。なぜならこの宝を得る方が、その人にとってははるかに素晴らしいことだからです。その人は喜びをもってこれを求めます。天の御国とはそういうものなのです。

二つ目の真珠のたとえも同じです。良い真珠を探している商人が、ある時、素晴らしい値打ちの真珠を見つけます。これもその時まで他人のものになっていなかったという意味で隠された状態にあります。そして重大な事実、そういう真珠が現にそこにある！ということです。それが分かる人にとってあまりに素晴らしくて値段など付けられない宝です。ですからその人は迷いもなく、自分の全財産を売り払ってでも、それを買います。喜んでそうするのです。

これらのたとえを読む時に思われることは、果たして私たちはどうだろうかということではないでしょうか。たとえに出て来る人々のように、他の一切を捨ててまでも天の御国を追い求めているだろうか。私たちがそうするかどうかは、イエス様による天の御国を私たちがそのような宝と見ているかどうか、そのように評価しているかにかかっています。それは見る目を持つ人をこのように行動させる宝です。改めてそういう宝がこの世界に来ているのだ！と示されて、私たちも自分の目をもう一度見開く者とされたいと思います。これらのたとえに導かれて、本当にそうだ！と改めて知り、このように求めることこそ最も幸いなことであり、私たちの喜びとなることです。

47～50 節にかけてもう一つのたとえが語られています。一般に「地引き網のたとえ」と呼ばれます。これは前回見た「毒麦のたとえ」に似ています。最後の日までは良い麦と毒麦は同居しています。しかし最後の日にそれはより分けられる。同じように良い魚と悪い魚は今は混在しています。悪いものは今すぐ除かれるわけではありません。しかし世の終わりの日により分けられ、悪い魚は捨てられる。これは前のたとえとのつながりで考えればこうなるでしょう。畑に隠された宝や高価な真珠にたとえられる天の御国

を誰もが見出し、求めるわけではない。その価値を認めない人々も今は違いがないかのようです。しかしやがて必ずさばきの日が来る。天の御国という宝を自分のものとして持たない人は神の前に悪い者とされます。自らの罪ゆえです。その人はそのままでは悪い魚として見分けられ、より分けられて、投げ捨てられる。そこで泣いて、歯ぎしりする。その日が来てからではもう遅い。そういう日が来るのです。

さて、こうして語られて来たたとえの結びが 51～52 節にあります。イエス様はそこで弟子たちに「あなたがたは、これらのことがみな分かりましたか」と尋ねます。彼らは「はい」と答えました。果たして彼らの言葉をその通りにとって良いのかどうか、私たちはやや躊躇します。弟子たちはこの後もまだまだ無理解な姿を露呈するからです。実際、15 章 16 節でイエス様から「あなたがたも、まだ分からないのですか」と言われる時があります。しかしこの彼らの言葉を否定的に見る必要はないと思います。イエス様はそのようには見ておられません。まだまだの状態であるとは言え、たとえを悟らない多くの人たちに比べて、確かに弟子たちは理解しています。

そんな彼らのことをイエス様は「天の御国の弟子となった学者」と言います。そしてあなたがたは「自分の倉から新しい物と古い物を取り出す一家の主人のようだ」と言います。古い物とは従来の教え、すなわち旧約聖書と言って良いと思います。一方の新しい物とはイエス様による教えのことでしょう。改めて注目すべきはイエス様は古い物を決して否定していないということです。イエス様は前にも「わたしは律法を廃棄するために来たのではなく、律法を成就するために来た」と言われました。先の時代に示されてきた旧約の教えと、イエス様の教えは一致します。そしてイエス様の教えは単に一致するというだけでなく、旧約聖書の教えを成就するものです。逆から言えば、イエス様の教えに聞くことによって旧約聖書の真の意味が分かって来る。35 節でイエス様がたとえで語っていることは「世界の基が据えられたときから隠されていること」だと言われました。引用元の詩篇 78 篇 2 節では「昔からの謎」という表現になっていました。神はこれまで旧約聖書を通して語って来られましたが、ついにイエス様において、ご自身の内に秘めて来られたこと、隠されて来た御旨を明らかにしておられます。私たちは旧約聖書に基づき、イエス様のお言葉に聞くことによって、神が備えてくださった奇しい救いの全貌が見えて来ることとなります。まさかこんな救いを神が備えていてくださっ

たとは！と驚嘆せざるを得ないような恵みの世界がここに差し出されています。弟子たちはこうして今や古い物でも新しい物でも取り出すことのできる学者とされたのです。イエス様の教えに聞き、旧約聖書とのつながりですべてが見えて来る人はみなそうです。そのように今や神の御心を悟るに至った学者には、この素晴らしい真理を人々に伝え教えて行くように！という使命が与えられるのです。

さてイエス様はこれらのたとえを話し終えると、ご自分の郷里ナザレへ行かれました。そして会堂で人々を教え始められました。続く人々の言葉を見ると、教えとともに力ある奇跡もそこで行われたようです。まさに天の御国の現れがそこにありました。人々はそれを見ました。そして驚嘆して言いました。「この人は、こんな知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう」。このように天の御国に接した彼らはイエス様を喜んで受け入れたのかと思いきや、続く 55 節以降には全く反対のことが書かれています。彼らは、あの人の家は私たちが良く知っている家ではないかと言います。その親も兄弟も、その妹たちも我々は良く知っている。我々と何ら変わらない普通の家出身の者ではないか。そんな家から偉大な人が出るはずはない。そんなことは我々は認めたくないし、認めない！こうして彼らはイエス様につまずいたのです。ここに人は見たからと言って信じるのではないという事例があります。明確な天の御国の現れがそこにあり、彼ら自身驚いているにもかかわらず、それを認めない。受け入れない人は何を示されても受け入れないのです。最初から態度を決めているのです。

そこで最後の 58 節に、イエス様は「彼らの不信仰のゆえに、そこでは多くの奇跡をなさらなかった」とあります。7 章 6 節：「聖なるものを犬に与えてはいけません。また、真珠を豚の前に投げてはいけません。犬や豚はそれらを足で踏みつけ、向き直って、あなたがたをかみ裂くこととなります。」 価値を認めず、どんなことをしても拒否する人に尊いものを差し出し続けても無駄であり、無益です。ですからイエス様はもうそこでは多くの奇蹟をなさらなかったのです。こうして彼らはその恵みに接する機会を益々失うという報いあるいは裁きを受けたわけです。13 章 12 節：「持っている人は与えられてもっと豊かになり、持っていない人は持っているものまで取り上げられるのです。」不信仰の態度を明らかに示した彼らは天の御国がいよいよ分からなくなり、またここから遠ざかる者へと自らを追いやって行ったのです。

このように 13 章の最後は人々の不信仰という応答で終わっています。ある意味で残念な結果です。しかしこれはこの章で見て来たことに照らせば特段驚くべきことではありません。特に種蒔きのたとえで見ましたように、これは彼らの心が 4 番目の良い地ではなかったことを示しています。その心は固く閉じていて頑としてみことばを受け付けない踏み固められた道端のような心であった。そしてこの章を読み終えるにあたっての重要な問いは、では私はどうなのかということでしょう。天の御国は畑に隠された宝のようなものです。多くの人は見出していないかもしれない。注目していないかもしれない。まさに隠された状態です。しかし重要な事実は、しかしそれはそこにある！ということです。その宝はイエス様の到来とともに実際にこの世界に来ている！ということです。本来、自分の罪のゆえにさばかれて当然の私たちでした。将来に望みを持たない私たちでした。しかしそんな私たちのところに神の恵みの支配がイエス様とともに来ています。私たちはイエス様を信じることを通して神との正しい関係に立たせていただけます。神の祝福に新たに生かしていただくことができます。神が人間を創造された時に意図された人間本来の状態への回復がここにあります。そして神との関係が回復された者として永遠に神と共に生きる祝福へ招かれています。これはこの世のどんなものとも比較できない宝です。他の一切のことを脇においても第一に求めるべき宝です。その宝が私たちの手の届くところまで来ています。私たちはこのたとえに導かれつつ、喜びをもってこれを求める生活へ進みたいと思います。そしてこれは永遠の昔から神がご計画くださった素晴らしい救いであることを知る学者とさせられ、新しい物でも古い物でも自由に取り出して自らが味わい、感謝しつつ、この素晴らしい宝を人々に宣べ伝え行く者とされたいと思います。